

平成 31 年度 私費外国人留学生 入学試験問題

小論文

(国際地域学科地域教育専攻)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 「問題」は1ページが白紙です。2ページから4ページが問題本文と設問です。
- 3 解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
- 4 解答は指定された解答用紙に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。
- 6 解答は横書きとし、指定された字数にまとめること。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。
- 8 試験中に問題紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

教師のふるまいには「望ましさ」の具現が期待される。その期待が如実にあらわれるのが「道徳」の授業である。

道徳は、2015年3月に小学校と中学校の学習指導要領の一部改正により、従来の「教科外活動」から「特別の教科」へと格上げされた。小学校では2018年度、中学校では2019年度からこれが完全実施される。「特別の教科」としての道徳科では、教科書が作成され、さらには評価もおこなわれる。数値による評価ではないものの、記述式によって授業内容の理解度が評価される。なお授業者は従来どおり学級担任である。とくに道徳科専門の教師の枠が新たに創設されるわけではない。多くの教師が、自分のクラスの子どもを前にして、格上げされた道徳の内容を教えることになる。

道徳で教えられる内容は、たとえば中学校の学習指導要領では「自主、自律、自由と責任」「思いやり、感謝」「遵法精神、公德心」「生命の尊さ」など計22項目に分類される。そこで、子ども間のトラブルである「いじめ」がどれくらい扱われうるかを調べてみると、「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」では計22項目のうち四つの項目に「いじめ」との関連性が示されている。

ところが道徳科では、いじめを含む子ども間のトラブル（子どもが被害者や加害者になる）が扱われることはあっても、教師が子どもに対してやってはならないふるまいが扱われることはない。道徳科の学習指導要領やその解説には、教師による暴力・暴言などの事案は登場しない。もちろん「体罰」という言葉も見当たらない。

それどころか、「教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風をつくるとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること」（「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」）とある。教師は子どもから敬愛される対象として子どもに提示される。道徳の世界では、教師という存在は批判の対象にはならない。「教育」者である教師は、望ましいふるまいをするものであって、暴力を振るうことも、暴言を吐くことも想定されていない。

「いじめ」においては、少なくとも教師は直接の加害者ではない。だから、その防止について教育内容として扱うことができる。だが「体罰」は、教師が直接の加害者である。だから、その是非を授業において問うことができないのである。

教育学では、学校で伝達される知識を「学校知」（または「教育知」）、私たちの普段の経験から得られる知識を「日常知」と呼ぶ。教育学においては、1980年代後半ごろから今日に至るまで、「学校知」に対する批判的検討がくり返されてきた。すなわち、「学校知」は抽象的で記号的な学びに偏向しており、私たちの現実的な感覚に基づいた「日常知」から乖離^{かいはり}してしまっている、という主張である。

道徳の授業では、「いじめ」に代表されるように、身近にいる人の心身を傷つけることが具体的な検討課題として扱われる。「いじめ」が教材になるのであれば、「体罰」もまた、学校を舞台にした「日常知」として活用しうる、最適な題材である。「いじめ」も「体罰」も学校で十分に起こりうる事態で

ある。それでも「体罰」という教材は採用されない。教師、ひいては教育行政という権力の所有者が、学校で伝達される知識を選別しているのだ。

マイケル・アップルが指摘したように、学校教育は、あたかも中立的な知識を生徒に提供しているように見える。教科書には中立的観点から事実が並べられていると信じられている。だが、そこで提供されているのは社会的・政治的な文脈を映し出した知識にすぎない。権力は知識を中立的なように装わせることで、社会的・政治的な関係性を維持している。

学校で伝達される道徳の知識において、教師は敬愛の対象として位置づけられる。さらには、そこで扱われるトラブルの類いはもっぱら子どもどうしのものであって、教師―生徒間のものではない。教師はつねに正しい存在であって、トラブルも間違いも起こすはずがないという前提を、子どもたちは知らず知らずのうちに学習していく。

大学で提供される知識もまた、社会的・政治的な文脈から決して無縁ではない。たとえば、大学でキャリア教育関連の授業を受講すれば、学生は、いつの間にか企業が求める人材へと適応していくことになる。だから、大学教育が権力の構造から自由な位置にいると主張することはできない。だが、それでも「体罰」を含むハラスメントに限っていえば、少なくとも小中高よりは、その問題に自ら向きあっているようにみえる。

大学の構内では「セクシャル・ハラスメント」「パワー・ハラスメント」「アカデミック・ハラスメント」「アルコール・ハラスメント」など、ハラスメント防止の啓発ポスターやパンフレットを頻繁に見かけることだろう。学生は、それらのハラスメントがあったときに「NO!」と言ってよいことを、暗黙のうちに学習していく。また、大学教員が学生に対して、それらハラスメントの具体的な内容や、学生が被害を受けた場合にどこに相談すべきなのかについてガイダンスをすることもある。各種ハラスメントが授業の具体的な題材になることさえある。

こうした大学の状況とは対照的に、小中高校では、教師によるハラスメントが「消える化」する。すでに世論や教育行政においては明らかに「見える化」しているにもかかわらず、学校のなかでは、あたかもそれは起きていないかのようである。

「教育」者のやることは正しい。この暗黙の前提は、今日における学校安全の関心事を振り返っても同じことが言える。2000年代以降、学校安全の最大の関心は二つあった。不審者対策（防犯）と震災対策（防災）である。学校行事の一環として、防犯訓練や防災訓練に参加した経験のある読者も多いことだろう。不審者と震災はいずれも、教師あるいは学校にとって外在的な損害である。つまり、学校関係者には直接関係のないところから、子どもを含む学校の構成員に対して損害が与えられるものだ。

ここで、組み体操のことを考えてみるといい。2000年代後半ごろから全国の学校の運動会・体育祭で、巨大な組み体操が披露されるようになった。組み体操の代表的な技である「ピラミッド」は、幼稚園で6段、小学校で9段、中学校で10段、高校で11段が最高到達段数とみられる。もうひとつ代表的な技として知られる「タワー」も、小中高いずれも最高で5段にまで達している。タワーは上方

に伸びていくため、段数のわりに高さが高くなる。

10段ピラミッドの場合、中学3年男子だと高さは7メートル、土台の生徒にかかる最大負荷は200kg/人に達する。それは極端だとしても、高さが4～5メートル、負荷が100kgを超えるような組み方は珍しくない。ピラミッドもタワーも、より巨大で高い組み方がもてはやされ、それが小学校や、さらには幼稚園にまで広がっている。

組み体操においては、組み方の巨大化・高層化と担い手の低年齢化が進み、そのなかで負傷事故もたくさん起きてきた。小学校における体育的活動中の負傷事故件数（部活動を除く）を見てみると、組み体操は跳び箱とバスケットボールに次いで事故が多い。跳び箱やバスケットボールは、全国の学校で複数の学年にまたがって実施されているのに対して、組み体操は6年生に特化されることが多く、またかならずしも全国でおこなわれているわけでもない。それを考慮すれば、事故率は他の競技種目よりもさらに高くなると推察される。

不審者が暴行目的で学校に入ってくることを歓迎する人はいない。一方、巨大な組み体操はむしろ積極的に導入されてきた。いずれの場合も子どもの身体が危険にさらされている。しかし、不審者の危険は敏感に察知されるが、組み体操の危険は察知されない。その差がどこにあるかというところ、その答えこそが「教育」である。不審者の侵入を「教育」という人は誰もいないが、巨大な組み体操は立派な「教育」活動とされる。「教育」というお墨付きがあるだけで、私たちは途端に、子どもの身体に迫り来る危険を見過ごしてしまう。

教師は正しく敬うべき存在である。教師が提供する教育は当然のごとく「望ましい」ものである。こうした強固な前提のもとに成り立つ学校教育において、教師による暴力・暴言は「消える化」していく。

（内田良「子供の安全・安心を脅かす「教育」」 片山悠樹・内田良・古田和久・牧野智和編『半径5メートルからの教育社会学』大月書店（2017）から抜粋、一部改変。）

設問 教育から「体罰」を取り除くために、学校関係者や保護者、地域住民に対して、教師としてあなたはどのように働きかけていくことができるか。教師による「体罰」について、筆者が問題としていることを要約し、それを踏まえて600字以上700字以内で論じなさい。

(100点)